調査レポート

男の容姿の不満点

「年齢別に見た男性の意識と行動調査 '９２」より

既婚者ではだんぜん「おなかが出ている」
ヤング層では「顔」、２０代後半では「毛深い」が特徴

１９９３年７月

ポーラ文化研究所

問合せ先：村澤・高谷

はじめに

前回のレポート(1993/06/25発行)で「魅力と顔－－男も顔の時代」となっている調査データをご紹介したが、今回は容姿についての第２弾となる。

「魅力と顔－－男も顔の時代」でも触れたように、現代は「顔・かたち」を含めた「見た目」の時代、善し悪しは別として「見た目」が大事とされている。そのためか、エステ、痩身、さらには美容整形などと、「見た目」を自分のこだわりで変えようと努力している女性たちもいる。では、男性たちは自分たちのからだをどう思っているのだろうか。

そこで、ポーラ文化研究所の実施している「年齢別に見た男性の意識と行動調査‘９２」より、「容姿に対する不満とその不満点」についての回答を分析してみた。

レポートの目的

「年齢別に見た男性の意識と行動調査‘９２」より、「容姿に対する不満とその不満点」の結果を抽出して、「不満」に対する男性の意識を明確にする。

調査レポート「年齢別に見た男性の意識と行動調査‘９２」

調　査　地　域　：東京駅３０ｋｍ圏

調査対象者数　　：16から65歳までの男性１０５０人

調査対象者数　　：

高校生	７５人	30－34歳（既婚）	７５人
19－24歳（大学生）	７５	35－39歳（既婚）	７５
19－24歳（社会人）	７５	42－45歳	１００
25－29歳（未婚）	７５	46－49歳	１００
25－29歳（既婚）	７５	50－59歳	１００
30－39歳（未婚）	１５０	60－65歳	７５

調査対象者抽出法：エリアサンプリング法

調　査　方　法　：戸別訪問面接聴取法および留置法の併用

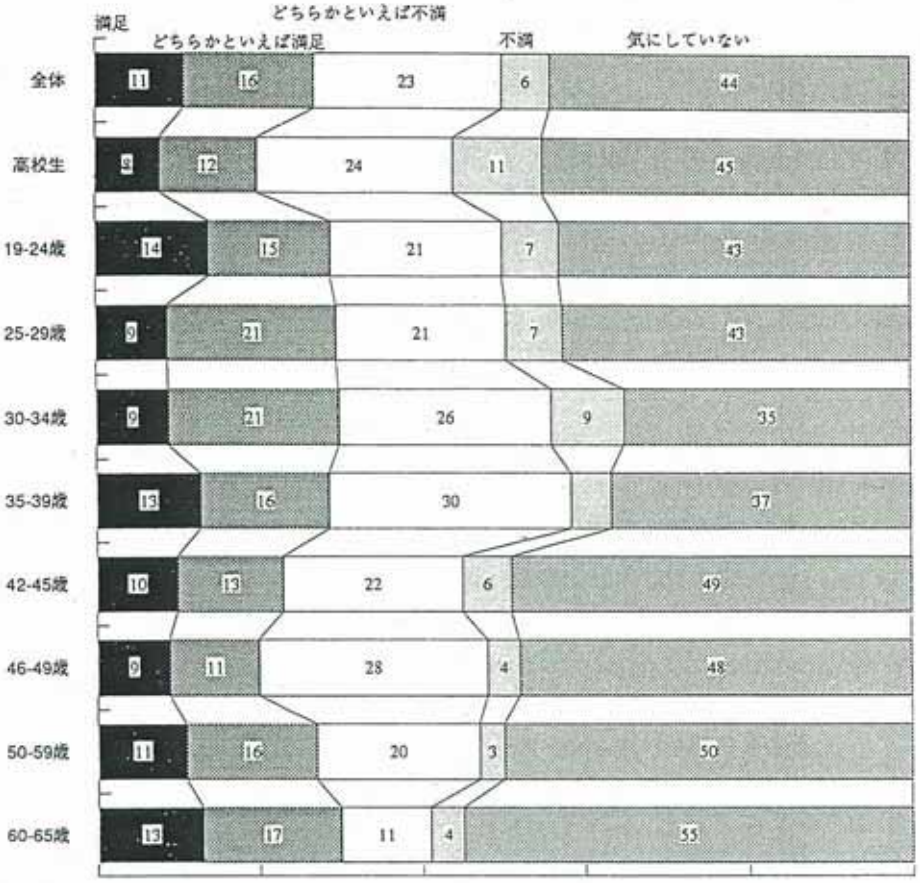
調　査　期　間　：１９９２年６月１９日～７月１０日

Ⅰ．結果

1．「自分の容姿に満足している」男性は約４分の１。「不満」な人は30代から40代にかけて多い。

さて今度は、自分の容姿への満足度を聞いている。

図1　自分の容姿の満足度



全体としては、「満足」「どちらかといえば満足」の満足派は27％と約４分の１。「不満」「どちらかといえば不満」の不満派は29％で、満足派とほぼ同数であった。一方、「気にしていない」人が44％と半数近くいることになる。

年齢別に見ると、30代が「気にしていない」人が一番少ない層で、満足にせよ不満にせよ、気にしている人が一番多いことになる。40代以降は年齢が高くなると「気にしていない」人が増え、＜50－59歳＞で50％、＜60－65歳＞では55％までになる。

「満足」か「不満」かを年齢別に見ると、「満足」と「不満」がほぼ同じ、あるいは「不満」が多いのは＜高校生＞、＜25－29歳＞、＜30－34歳＞で、ほかの年齢では「満足」が多い。

さらに、「どちらか」も含めた満足派、不満派で見ると、満足派が多い年齢は＜50－59歳＞、＜60－65歳＞、つまり５０歳以上で、それ以下ではほぼ同じか不満派が多くなる。この差が一番多いのは＜高校生＞で15％、続いて＜46－49歳＞で12％となる。

全体を見ると、はっきりと「満足」「不満」を述べた人を比べると、満足が多いが、「どちらかと言うと」を含めると、不満が多くなる。

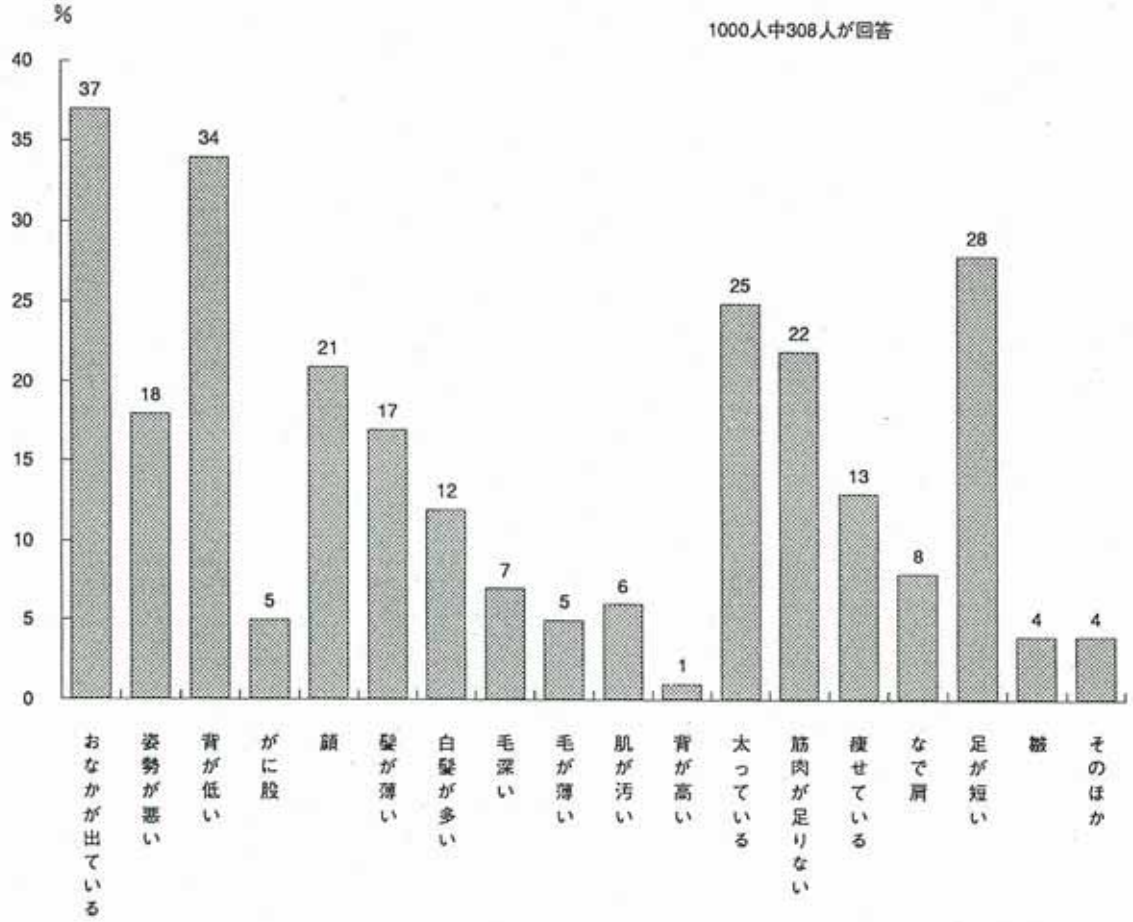
また、５０代、６０代に入ると、「気にしていない」と満足派が増える結果であった。

なお、＜20－29歳＞＜30－34歳＞＜35－39歳＞では未既婚を比べているが、顕著な違いが見い出せなかったので略している。

２．「容姿への不満点」は「おなかが出ている」「背が低い」「足が短い」がベスト３。
高校生から２０代前半は「顔」。２０代後半は「毛深さ」

「自分の容姿に不満のある人にその不満点を具体的に聞いている。その結果を見てみよう。

図２　自分の容姿の不満点



容姿への不満点についての回答は１０５０人中３０８人から得ている。その結果を年齢別、不満別に見ると次のような特徴が見られる。ただし、人数の絶対数は決して十分とは言えないために明言はできないが、納得できる結果である。

全体的には、「おなかが出ている」が１位で37%、「背が低い」が２位の34%、「足が短い」が３位で28%、あと「太っている」（25%）「筋肉が足りない」（22%）「顔」（21%）と続く。

また、「顔」が全体のベスト６に入るのは時代を表しているのだろうか。

次に、年齢別、不満項目別に見た主な特徴を見てみると、以下のようになる。

・「おなかが出ている」は既婚者に多く、全年代で共通して１位、または２位。
・「背が低い」は19～24歳の社会人、30代後半の未既婚者に多い。

・「顔」については高校生から19～24歳の学生と社会人に多い。
・「毛深い」は20代後半に特異的に多い。
・「太っている」と感じている人は19～24歳、30代既婚者に多い。
・「足が短い」は高校生、20代後半、40代半ばの団塊の世代に多い。
・30代未婚では、30代前半と後半では不満が異なる。後半になると、「背が低い」、「髪が薄い」「筋肉が足りない」が多くなる。

参考　年齢別に見た不満点ベスト３（多い順）

高 校 生	「筋肉が足りない」	「顔」	「足が短い」
19～24歳 学生	「顔」	「背が低い」	「太っている」
19～24歳 社会人	「背が低い」	「顔」	「足が短い」
25～29歳 未婚	「筋肉が足りない」	「おなかが出ている」	「足が短い」
25～29歳 既婚	「おなかが出ている」	「足が短い」	「背が低い」「筋肉が足りない」
30～34歳 未婚	「太っている」	「背が低い」「筋肉が足りない」	「足が短い」
30～34歳 既婚	「おなかが出ている」	「太っている」	「背が低い」
35～39歳 未婚	「背が低い」「筋肉が足りない」	「髪が薄い」	
35～39歳 既婚	「背が低い」	「おなかが出ている」	「太っている」
42 ～ 45 歳	「おなかが出ている」	「背が低い」「足が短い」	
46 ～ 49 歳	「おなかが出ている」	「背が低い」	「髪が薄い」
50 ～ 59 歳	「おなかが出ている」	「背が低い」	「白髪が多い」「背が低い」
60 ～ 65 歳	「姿勢が悪い」	「おなかが出ている」「太っている」「背が低い」	

注：絶対数が少ないため、参考程度の使用として見ていただきたい。

Ⅱ．考察

1.「おなかが出ている」という不満

男性の容姿の不満については、「気にしていない」が半数近くいる一方、30代から40代にかけて「自分の容姿に不満」な人が多く、特に既婚者は「おなかが出ている」が不満のほぼトップを占めている。「太っている」ことよりも「おなかが出ている」ことが問題のようだ。

この「おなかが出ている」については、その程度など、これ以上のことを聞いていないので、残念ながら詳細はわからないが、結婚して妻から、あるいは子供から言われるのだろうか。

面白いことに、このことを最近出版された『なぜ太鼓腹は嫌われるようになったのか』の話と重ねてみることができる。かつての日本の社会では、男性は「腹が出ていた方がエライ」という美意識があり、そのために痩せ型の人は腹を丸くするためにかなりの努力が求められたようだ。腹が出てどっしりした恰幅のよさが美とされた時代である。しかし、その後の男性のあり方を含め、大きな意識の変化の中で時代の美意識は変わった。「腹が出ている」ことが醜であり、「腹が出ていない」ことがよい＝美とされている。

とすると、女性にとっての痩身、エステのように、男性も「おなかを引っ込める」ために積極的に努力をしはじめるのだろうか。次項でも触れるが、少し前に話題となった「男性の脱毛」同様、男のための「エステ」「痩身」がマスコミを賑わすようになるのだろうか。

または、「おなかが出る」志向が成熟した大人、中年のイメージでとらえると、「おなかが出ていない」は青年である。成熟よりも若者、ヤング志向ということだろうか。

2.「顔」と「毛深さ」

別の点で興味深いのは、高校生から２０代前半にかけてのヤング層で、不満点として「顔」が１位か２位に出てくることである。確かに思春期を中心に、自分の顔について不満を抱き、親を恨んだりしたことは話にはあるが、それと同類であろうか。あるいは、５、６年ほど前のショーユ顔、ソース顔というように男の顔がもてあそばされた時代の影響だろうか。あるいは「男も顔」という時代がそう意識させるのだろうか。

前回のレポートで５０代の男性がその前後に男性よりも「顔・かたちは男の魅力にかなり関係する」と考える率が高かったことと考え併せると、決してヤング層だけの問題ではなさそうだ。男も顔を大事にする時代になっているようだ。

さらに興味深かったのは、「毛深さ」についてである。絶対的な人数は少ないが、20代後半のみが24％と高い値を示した。ほかは８、９％以下である。

なぜだろう。突然、彼らだけが毛深くなるとは考えにくい。むしろ、現実として「毛深い」というよりも、「毛深い」と思わされているだけではないだろうか。１９８８年にポーラ文化研究所が実施した「体毛観」の調査では、当時、「毛深さ」＝「臭さ」＝よくないもの、だから「脱毛」して「ツルスベ」にする、という傾向がすでに現われていた。そのような時代に育った人が、自分たちの「体毛」を「毛深い」と意識したと考えられる。「ツルスベ」現象が、「毛深い」と思う人を増やした、と考えると理解できる。

かつて、男たちは腹を割って話したり、腹を探ったり、腹が黒かったり、腹を立てたりした。まさに「太鼓腹」が美の時代である。しかし、腹、すなわちおなかが出ることが嫌われる現代、このような腹芸をする場所が消滅し、死語になろうとしているように見える。

私たちの美意識は時代によって変わりつつあることは確かなようだ。